保育内容「健康」の研究動向に関する一考察
－CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて－

A Study on Research Trends in Child Care Content "Health": Using Text Mining on Titles of Published Papers

畑野　裕子*　　大竹　留美**

要旨

保育内容「健康」に関する研究は、近年その数が、増え始めている。しかし、保育者養成課程における保育内容「健康」に関する研究テーマ動向について、その詳細な検討は、数少ない。さらに、保育内容「健康」に関する客観的な分析に観点を絞った研究は、ほとんどみられない。そこで、本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）から、「保育内容　健康」をキーワードとしてフリーワードに入力し、それらに関する文献を検索した。そこで得られた論文のタイトルに対し、テキストマイニングの手法を用いた計量的なアプローチにより研究動向を分析して、考察を試みる。

キーワード：保育者養成課程　CiNii　テキストマイニング　実習指導　運動あそび　体づくり運動

1．緒言

近年の幼稚園教育要領（文部科学省，2017)、保育所保育指針（厚生労働省，2017）や幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府，2017）の改訂や、保育・幼児教育関連の省令の公示などを背景として、保育者養成課程における保育力の基礎を培うことを目的としたカリキュラムに関して、「保育内容」の授業が開設されている。保育内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」と 5 領域に分けられ、その要素からみたアプローチを行うことによって、子どもたちの健やかな成長・発達につなげるものである。日本の幼児期の教育・保育の基準となる「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」には、そのねらい及び内容が示されている。保育者養成課程に在籍する学生にとって、保育現場で実施する保育におけるそのねらい・内容が重要であることはいうまでもない。したがって、保育者養成課程においては、保育が有益に進められるように、「保育内容」の学習がなされている。

そして、幼稚園教育要領の教育内容の変遷についてみると、清水（2017）は、「昭和23年保育要領から平成20年幼稚園教育要領の各改訂における歴史的変遷，改訂の概要，改訂の要点を幼稚園教育要領，中央教育審議会答申，文部科学省報告書，先行研究などから分析し，改訂毎に詳説した。さらに，幼稚園教育要領における領域「健康」の教育内容の歴史的変遷について，行政指針や報告書を手掛かりに教育的意義を含め考察することで，その特質を明らかにした」と報告している。その領域「健康」についての変遷は、平成元年、平成10年、平成20年、そして今回の平成30年の改訂においても、清水（2017）の報告にもみられるように、その「ねらい」

＊　神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科　教授
＊＊神戸親和女子大学大学院　修了生

は、変えられることなく一貫して踏襲されている。また「内容」においても、時代の流れに沿った内容が追記されていくことがみられる。つまり、保育内容「健康」は、いつの時代にも重要なそして変わることのない保育・幼児教育の指針であり、要領であるといえよう。

そこで、その保育内容「健康」に関する研究を概観してみると、澤田（2019）は、「健康」の教科書を、また、村田（2019）は、幼児の身体の不器用さについて研究している。そして、伊藤（2018）は、学習到達度を検証している。次に、原井ら（2019）は、保育内容の指導における科目間連携について述べている。田村ら（2019）は、防災教育を検討している。今津（2019）は、教授法について報告している。それらをまとめると、体づくり運動、運動遊び、について検討している報告が数多くあげられる。その中でも、高井（2019）は、運動遊びに関して述べている。中村（2009）は、子どもの体力低下に視線を向けている。しかし、保育学会の発表論文を研究した永野（2007）は、「保育内容に関する研究報告が、1980年代には、保育学会発表論文の30％を占めていたものの2000年代前半には、20％と減少している」と報告している。つまり、「保育内容」を研究対象としている文献が、日本保育学会の発表論文としては、元々少なく、しかも減少していることが報告されている。以上のように、保育内容「健康」の先行研究は、他の領域と比較しても、数少ないが、同様な研究が、ほとんどみられないことから、本報では、国立情報科学研究所の学術情報ナビゲータ（CiNii）から「保育内容　健康」をキーワードとしてフリーワードに入力して検索し、論文のタイトルに対して、テキストマイニングの手法を用いた計量的なアプローチにより研究動向を分析し、考察を試みることを目的とする。

２．方法

2.1　対象文献の抽出

国立情報学研究所（NII）の CiNii（NII 学術情報ナビゲータ「サイニィ」）を使用し、1944年～2019年までに発行され、CiNii に掲載された文献について、「保育内容　健康」のキーワードをもとに、フリーワードに入力して、調査対象文献を 104 件、抽出した。その中で有効な調査対象文献については102件となった。また、これらのデータベースからは、論文タイトルとともに、執筆者氏名、出典、執筆年、論文のページ数が検索可能であるため、それらについても収集した。なお、2019年12月 2 日現在、「保育内容」のキーワードでフリーワードに入力して、検索した結果、1,814件であった。「保育内容健康」のキーワードでは、58件であった。つまりキーワード検索により研究対象論文の数に差異が生まれるので、研究対象を見極める基準を慎重に決定付ける必要がある。先述の通り、永野（2007）の報告にみられるように、「保育内容」の研究が、数多くなされているとは言い難い実状があるが、現状の対象文献の102件をテキストマイニングにより、検討していく。

抽出文献をもとに、次にあげる文献の出典に関して、調査対象文献を整理して絞り込みを行った。なお学会出版物においては、一般的な学会発表要旨を含んでいるものの、CiNii のキーワード検索により抽出された文献に含まれていることから、分析対象とした。

① 学会出版物：日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物に所収されている文献

② 大学紀要：大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献
③ その他：日本幼稚園協会、全国保育士養成協議会、出版社が発行する研究雑誌などに掲載されている文献、未登録論文

また、1960年～2019年（10月１日）までに発行され掲載された文献について、経年の変化を概括するために幼稚園教育要領の改訂時期の区切り（1956年、1964年、1989年、1998年、2008年、2017年）を参考に、先行実施・改訂間の年数を考慮したうえで、本報では便宜上次のように４つに区分（1960年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年）し、整理することとした。

2.2 分析の手続き

前述した方法で抽出した論文タイトルには、学会発表における番号や記号その他にも直接論文タイトルとは関連性のない名称（文献における特集記事やシンポジウムなどの情報）を含んでいるものが多数あった。それらの今回の分析に関係がないと思われる情報については、各論文タイトルをチェックして、不必要な情報に関して削除したうえで論文タイトルを整理し次資料とした。なお、分析は上記に抽出した論文タイトルに対するテキストマイニングを KH Coder2.00f（樋口，2001，2014，2015）を用いて実施した。同時に、年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみた研究動向の推移について検討した。この手法を用いた研究としては、例えば、「保育内容」に関する研究動向を分析した畑野（2019）の報告がある。これを参考に本報では、以下の手続きで分析を進めた。

(1)「保育内容　健康」に関する研究の構造の把握

抽出した文献のタイトルについて形態素解析を行い、論文タイトルに含まれている名詞句、サ変名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから研究の構造を解釈した。

(2) 論文種別による研究動向の差異の検討

出現頻度上位語句の共起ネットワークに、論文種別を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、論文種別による研究動向の差異について検討した。

(3) 年代別にみた研究動向の推移

年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみられた研究動向の推移について検討した。

３．結果と考察

3.1 「保育内容　健康」に関する論文の CiNii 掲載状況

2019年４月26日現在、抽出文献は103件であった。なお、これら103件の抽出文献のなかで CiNii に掲載されているタイトル名として、論文名以外の語句を有する文献が多くみられた。そこで、方法に記したようにそれらの文献については、論文名を確認し、最終的には102件の抽出文献に対して二次資料を作成した。今回、対象となった論文の件数が102件と数少ないため、テキストマイニングによる分析では、限界があると考えられる。しかし、語句数は、1,191件であり、語句の表、共起ネットワーク図ともに、検証結果として採用できると判断したもの

である。表１は、それら抽出文献について、文献の出典別に出現度数及びパーセンテージを示したものである。文献の出典をみると、大学が発行する研究紀要が96件で、全体の94.1％を占めており、最も多く、続いて学会発行の出版物、その他の出典で各３件、2.9％である。

また発表年でみると、表２に示したように、2017年～2019年が58件で全体の56.9％を占めており、最も多く、続いて2008年～2016年の31件で30.4％、1998年～2007年の８件で7.8％、1960年～1997年に３件で2.9％となっている。加えて、未登録論文が２件で、全体の2.0％となっている。1988年～2007年から2008年～2016年には、約４倍近く件数が増加しており、また2017年～2019年では、約２年間にもかかわらず、全体の６割弱が出現していることが読み取れる。

表１　「保育内容　健康」に関する論文の出典別度数及びパーセンテージ

論文種別	件数	%
学　会	3	2.9
紀　要	96	94.1
その他	3	2.9
総　計	102	

表２　「保育内容　健康」に関する論文の年代別度数及びパーセンテージ

年　代	件数	%
1960年～1997年	3	2.9
1998年～2007年	8	7.8
2008年～2016年	31	30.4
2017年～2019年	58	56.9
未登録	2	2.0
総　計	102	

表３は、文献の出典と発表年をクロス集計した結果を示したものである。大学が発行する研究紀要をみると、2017年～2019年が55件、2008年～2016年には30件、1998年～2007年が７件、1960年～1997年の年代には３件であった。研究紀要の中には、その発表年代の未登録論文が、１件確認されている。学会が発行する出版物については、1998年～2007年が１件、2017年～2019年が２件となっている。その他の出版物については、2017年～2019年、2008年～2016年がそれぞれ１件発行されており、発表年代について未登録出版物が１件であった。

表３　「保育内容　健康」に関する研究における情報文献の出典と発表年のクロス集計

	学　会	紀　要	その他	総　計
1960年～1997年	―	3	―	3
1998年～2007年	1	7	―	8
2008年～2016年	―	30	1	31
2017年～2019年	2	55	1	58
未登録	―	1	1	2
総　計	3	96	3	102

以上の結果から、「保育内容　健康」における研究の年次変化については、大学紀要においてかなりの増加傾向がみられた。そして、「保育内容　健康」に関する研究の総計は、年次変化に伴い徐々に増加傾向を示しているといえる。

3.2　「保育内容　健康」に関する論文タイトルの形態素解析

「保育内容　健康」に関する研究の動向を明らかにするために、論文タイトルにおいてどのような語句が選択される傾向にあるについて、計量的分析を試みようと、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、「保育内容　健康」に関する研究の論文タイトルからの抽出語総数は、計1,191語であった。

抽出語の中でも、まず名詞句についてみてみる。表４は、文献のタイトルに使用されている名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「内容」90件であり、続いて「領域」29件、「幼児」18件、「遊び」「幼稚園」17件、「科目」「学生」「子ども」は11件、「環境」10件となっている。

次に、抽出語の中でも、サ変名詞句についてみてみる。表５は、文献のタイトルに使用されているサ変名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「保育」で130件、続いて「考察」24件、「教育」23件、「授業」「養成」21件、「運動」「研究」19件、「実践」15件、「指導」14件、「検討」11件、「関係」「分析」９件、「活動」「実習」「表現」８件となっている。

表４　文献のタイトルに使用されている出現回数５以上の名詞句（頻度順）

名詞	頻度	名詞	頻度
内容	90	中心	9
領域	29	教材	8
幼児	18	身体	8
遊び	17	人間	8
幼稚園	17	教員	7
科目	11	能力	7
学生	11	要領	6
子ども	11	課程	5
環境	10	知見	5

表５　文献のタイトルに使用されている出現回数５以上のサ変名詞句（頻度順）

サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度
保育	130	分析	9
考察	24	活動	8
教育	23	実習	8
授業	21	表現	8
養成	21	学習	7
運動	19	構成	7
研究	19	展開	7
実践	15	関連	6
指導	14	生活	6
検討	11	着目	6
関係	9	依拠	5

3.3　「保育内容　健康」に関する研究の構造

抽出語間の関連性を探求するために、表４・表５に示した出現回数５以上の抽出語の中でも、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果については図１に示し、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみてみる。

論文に選択される語句の傾向として、表４・表５の出現回数５以上の名詞句と同様に図１の抽出語間の関連である共起ネットワークにおいても、最も出現回数が多い「保育」や「内容」を中心として、次のようにとらえられる。「保育内容　健康」に関する研究の構造としては、まず最も出現回数が多いサ変名詞句「保育」を中心に、キーワードとなる名詞句「内容」が中核をなしている。それらに関連して、「保育」「内容」「考察」「領域」「授業」「実践」「中心」のまとまりがみられる。その出現回数の多いまとまりから、保育者養成課程での保育内容に関

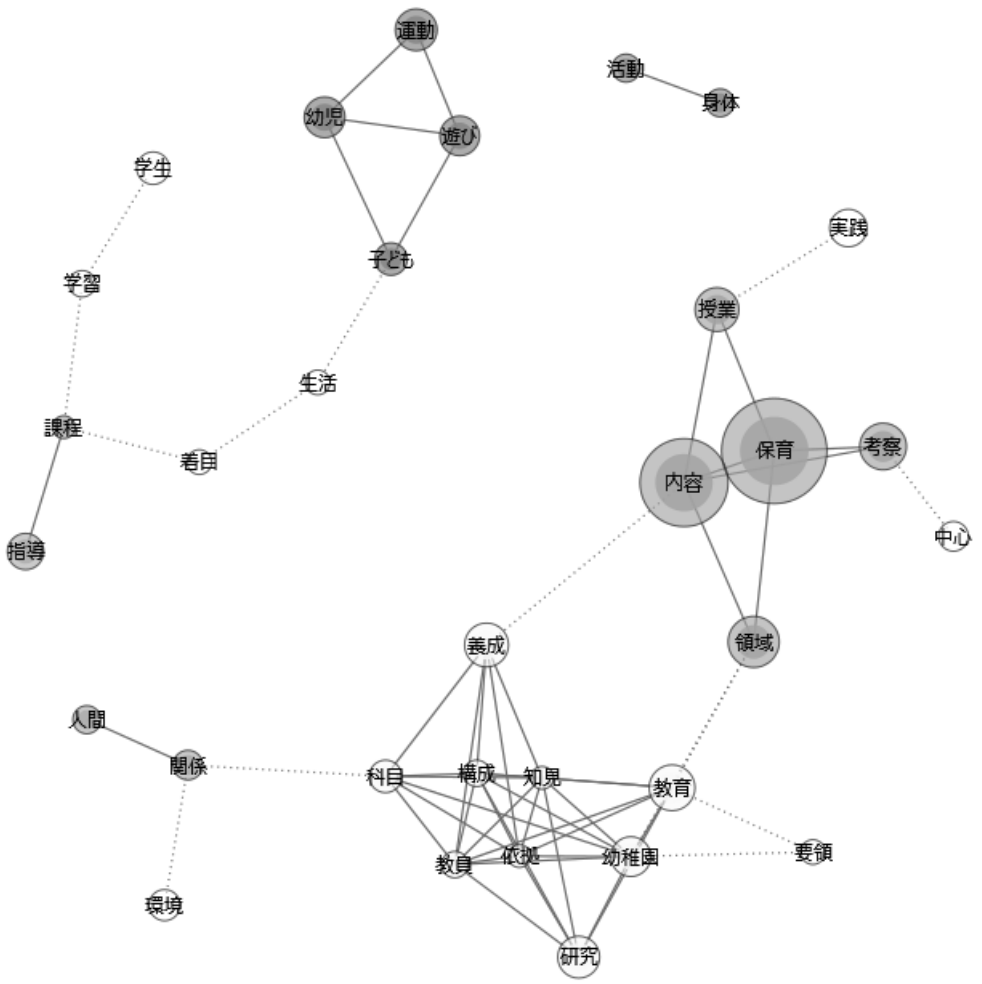

図１　「保育内容　環境」に関する論文の抽出語間の共起ネットワーク

する教育が、学生の実情に即して行われていることが推察できる。また、「内容」から「養成」「科目」「構成」「知見」「教育」「幼稚園」「研究」「依拠」「教員」のまとまりがみられる。このまとまりは、最大のまとまりの「領域」からもつながりがみられる。その「科目」と関連するまとまりに「関係」「人間」「環境」のまとまりがみられる。並列して、規模は小さいものの「運動」「遊び」「幼児」「子ども」のまとまりがみられる。そのまとまりと「生活」「着目」「課程」「指導」「学習」「学生」のまとまりにつながっている。「活動」「身体」のまとまりもみられた。この共起ネットワークの最大のまとまりを中心にそこからつながっているまとまりから読み取れるのは、「幼稚園」「教員」「科目」「養成」「構成」といった「養成」課程での「授業」「実践」であるといえよう。またそこには、「考察」があり、「領域」があることから、「保育」「内容」の授業には、「領域」についても学び、考察を重ね、実際のカリキュラムに結びつけていることが推察されよう。保育内容については、５領域が多岐にわたって組み込まれていると考えられる。同様に、「運動」「遊び」「幼児」「子ども」のまとまりにおいても、日常実施される保育・教育の中で、展開している内容である「生活」「課程」「指導」「学習」「学生」と結びついている内容であることが明らかになっている。

3.4　論文種別による研究動向の差異の検討

論文種別との共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図 2 に示す。図 2 より、大学紀要と学会出版物、その他の出版物において、「保育」「内容」「養成」が中核をなしていると思われる。「学会出版物」と「大学紀要」からみられるのは、「学習」「表現」「研究」「分析」「教員」の共起ネットワークである。その構成から保育・教育者の養成に関する語句であることが推察される。「大学紀要」「その他の出版物」からは、「能力」「運動」「中心」「幼稚園」「教材」「検討」「授業」「遊び」「考察」のネットワークを構成している。前述の推察と同様であろうが、もう一つ付け加えるならば、「幼稚園」の語句からは、保育・教育現場での、実習、保育・教育を推察することができる。「大学紀要」からは、「子ども」「学生」「知見」「指導」「関係」「課程」「着目」「活動」「関連」「科目」「依拠」「環境」「生活」「実習」「人間」のつながりがみられる。このことが意味する事柄は、大学での、保育内容の授業との関連であることは言うまでもない。そして、同じく保育内容の領域である「環境」「人間」「関係」がみられ、保育内容の 5 領域のつながりが強いことが考えられる。この共起図は、出現語句が1,191件と数少ないこともあり、出典が一番多い「大学紀要」に出現語句が集中していると考えられる。

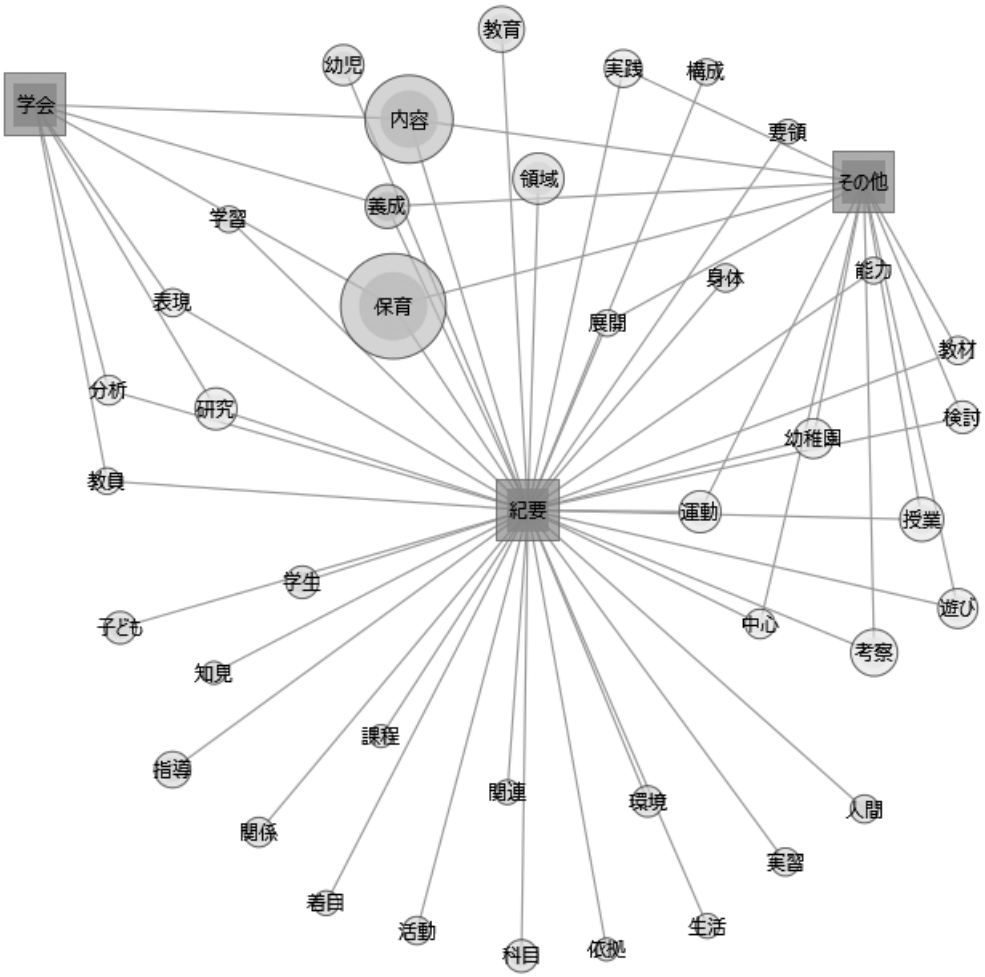

図 2　「保育内容　健康」に関する論文種別による抽出語との共起ネットワーク

3.5　年代別に見た研究動向の推移

「保育内容　健康」に関する年代と共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図3に示す。図3において、中心にある抽出語「保育」「内容」は、1960年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年そして、年代未登録論文全ての年代区分についてみられる。したがって、「保育内容　健康」に関する論文タイトルを年代による抽出語との共起ネットワークから、「保育」「内容」の抽出語は各年代に共通にみられ、脈々と継続されていることが読み取れる。また、時代とともに、論文タイトルの傾向は変化している。1960年～1997年時代の「幼児」「研究」の抽出語は、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年のどの年代にもみられることから、保育内容の研究において重要な語句であると考えられる。また、1960年～1997年に出現した「生活」の語句は、保育＝生活として実施されていることが伺われる。「考察」「授業」の語句がみられたのは、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年であった。保育・教育者養成校における授業を念頭に考察が重ねられ、保育・教育実習、保育・教育現場での実践に結びつける研究が行われたと推察される。「実践」と「表現」に共起がみられた年代は、1998年～2007年、2008年～2016年であった。これは保育・教育者の養成において、机上の学習から、実践に重きを置くような変遷が考えられる。また、保育内容「健康」

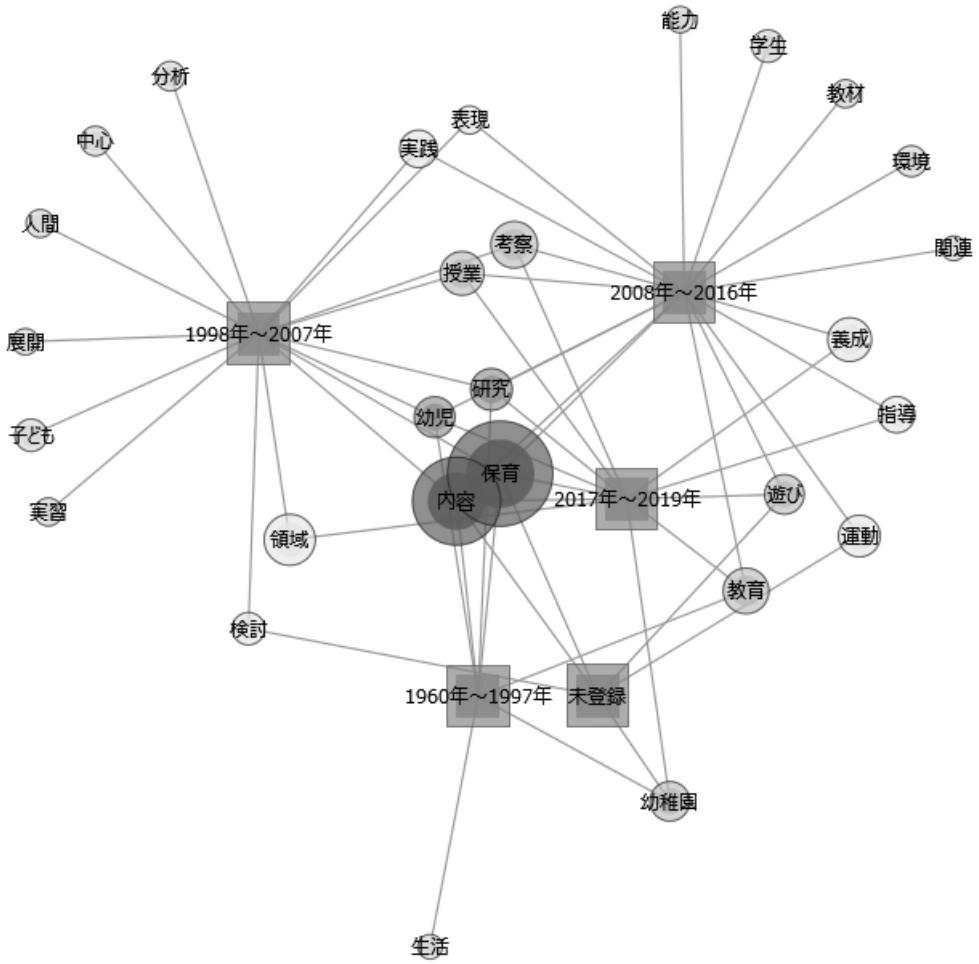

図3　「保育内容　健康」に関する年代別による抽出語との共起ネットワーク

には体育・運動における保育内容「表現」が深くかかわっているといえよう。「養成」「指導」の語句の共起は、2008年～2016年、2017年～2019年にみられる。そのまま文字通り、保育・教育者の養成、指導における研究であることが、明らかになったものである。1998年～2007年の「分析」「中心」「人間」「展開」「子ども」「実習」の語句からは、実習における子ども中心の保育・教育を分析し、展開することを読み取ることができる。学校教育の中ではいわゆる「ゆとり教育」が実施されている時期である。学校教育を受ける前段階の幼児教育にもその影響は強いと考えられる。つまり、教育者側にとっては、子どもたちの保育・教育にゆとりを持たせるよう配慮しながらの実施であったと思われる。また、2008年～2016年に出現した「能力」「学生」「教材」「環境」「関連」の語句からは、ゆとり教育からの脱却ともいえる指導要領が施行されつつある時代であることから、学生の能力をその教材や環境によって底上げする養成に関する研究がなされていたことが推察できる。

3.6　「保育内容　健康」の研究にみられる抽出語に関する特徴的な研究動向の例

「保育内容　健康」に関する論文の CiNii 掲載状況、「保育内容　健康」に関する研究の構造、論文種別による研究動向の差異、年代別にみた研究動向の推移を検討した。検索では、文献において「保育内容　健康」がキーワードで登録されており、タイトルそのものに含んでいるとは限らない。しかし、その中でタイトルを検索するという仕組みの限界はあるものの、全体的な研究傾向を明らかにすることができた。ここで、近年の文献数の増加を踏まえ、さらに年代間で共通にみられる語句に注目し、特徴的と思われる文献をあげて、「保育内容　健康」に関する研究の動向をみてみる。具体的には、本報で取り上げた「保育内容　健康」に関する CiNii 掲載論文のタイトルからみた研究動向に関して、先行研究と照らし合わせて俯瞰的にみてみる。今回の「保育内容　健康」については前述しているように、その対象論文は102件と数少ないものであった。そのため運動遊びについての、先行研究を交えて、考察をすすめることとした。

「学士力」に目を向けた畑野（2017）は、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れて、「保育内容の研究・表現」の授業を対象として、総合的な学習の学習指導課程と指導法に関する実践的研究を行っている。そして、保育内容「健康」「環境」についての教科書の内容の分析をした澤田（2019）は、8 種類の教科書の重要事項に着目し、比較検討している。具体的には、各教科書から目次になっている56の項目を取り上げ、重要事項である項目と、重要事項であると考えられるものに関して、その扱われる頻度の低い事項を取り上げている。また、村田（2019）は、保育内容「健康」における体づくり運動の効果について検証し、幼児の身体の不器用さの改善について検討している。具体的には、幼児の身体的不器用さについて、微細神経学的兆候検査（SNS）を検証している。不器用さに伴う問題点に注目し、からだづくり運動を取り入れた活動をしていくことで、その解消に向けていこうと課題に取り組んでいる。伊藤（2018）は、授業での学生の自己評価により、学習到達度を検証している。保育内容「健康」の授業における自己評価であり、その理解度を自分で分析することが、反省や計画の一助になることが考えられる。さらに、原井ら（2019）は、保育内容の指導における科目間連携の必要性について述べ、5 領域の枠組みについてシラバスを振り返り、課題を検討している。具体的

には、授業を組み立てる教員の連携を伴うものであり、単独で実施できる内容ではないことが確認できる。冒頭で前述した保育内容「健康」には、「危険な場所，危険な遊び方，災害時などの行動の仕方が分かり，安全に気を付けて行動する。」という内容が掲げられている。このことに関して、田村ら（2019）の防災教育の報告は、実際に被災した状況を想定して、数日間を過ごし、来る予測のつかない災害に備える・対応策を練るという大震災を踏まえた上での防災教育が重要な教育内容であると考えられる。

一方、来年度施行の学習指導要領においては、プログラミング教育を筆頭に、ICT を利用した教育を進め、子どもの学びを進化させるアクティブ・ラーニングを取り入れる授業内容が掲げられている。前述において畑野（2017）が取り上げたアクティブ・ラーニングに関連した報告を概観した。そこで、他の報告についてもみてみると、今津（2019）は、教授法について次のように述べている。具体的には、保育内容「健康」の授業において、講義のみではなく、「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。また、模擬保育の振り返りや事例検討の場合は、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークも有効である。」である。このようなアクティブ・ラーニングによる学習活動によって、学生の学習意欲、具体的に考える力、保育・教育の力を身につけることが迅速に、深くなされていくことが推察される。「保育内容」の「健康」を概観していく上で、体づくり運動、運動遊び、について検討している報告も、数多くみられる。その中でも、畑野（2017）は、ダンス授業における「新聞紙」を用いた表現的運動遊びを取り入れている。その内容は、ダンスの振り付けを体感する前段階として、目の前に舞い降りてくる新聞紙の動きをみて、生徒らが、表現するというものである。この表現的運動遊びは、ダンスを「創作」して表現するという一連の動きに結びついていくものである。その指導を実施することで、生徒がダンスの動きを、視覚的にも身体的にも理解することが可能となり、苦手意識を和らげることにもつながると考えられる。

高井（2019）は、質の高い運動遊びに注目し、「遊び」と「学び」の接続を研究した。そして、そこに介在する「環境」である大人(保育・教育者)が必要であり、学習教育要領の「生きる力」の基礎を培う上での「学び」があることを示唆している。一方、中村（2009）は、子どもの体力・運動能力の低下を危惧し、その原因を追究し、体力づくりや運動能力向上のための取り組みについても言及している。具体的には、体力低下の直接的な原因として、「基本的な動作の未収得」「運動量の減少」をあげている。発達曲線が示す発達の速度と、基本的な動作の身につける度合いが追い付いていないことを危惧している。そして、その対策として、児童生徒の基本的な動作の習得、運動量の増大、生活習慣の改善、大人（教師、保護者等）の意識向上をあげている。学生の運動遊びの経験に関してみると、畑野ら（2019）は、結果から学習内容のあり方に反映する研究を報告している。具体的には、保育者養成課程における学生の運動遊び経験を調査している。その結果をもとに、今後の幼児に対する運動遊びの内容について、保育者養成課程における保育・教育に活かせるような授業内容を提言している。また、子どもの「運動遊び」に関するテキストマイニングによる研究動向の報告（畑野，2018）から、保育内容「健康」に結びつく運動遊びの様々な内容が示唆されよう。

以上のように、保育内容「健康」に関し、運動遊びにおいても、様々な角度から、研究がなされている。そこで、本報では、その102件の論文タイトルのテキストマイニングに着目して

検討した。先行研究を検討した結果、保育内容「健康」において、単独で研究を成立させることに加えて、「健康」「環境」「言葉」「人間関係」「表現」の５領域のうちの何れかとの関係性を考慮して研究されていることが明らかになった。

４．総括

本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）から、「保育内容　健康」をキーワードとしてフリーワードを入力し、それらに関する文献を検索した。そして、論文のタイトルに対して、テキストマイニングの手法を用いた計量的なアプローチにより研究動向を分析の上、考察を試みた。しかし、「保育内容　健康」での検索結果の論文タイトルは、102件と数少なかった。その検出結果より、出現頻度の高い名詞句は、「内容」「領域」「幼児」「遊び」「幼稚園」「科目」「学生」「子ども」であった。また、出現頻度の高いサ変名詞句は、「保育」「考察」「教育」「授業」「養成」「運動」「研究」「実践」「指導」「検討」であった。このことから保育内容「健康」において、大学など、教育機関における語句が頻出しており、「健康」と関係が深いと考えられる「運動」についても、みることができる。参考までに、動詞句については「用いる」「関わる」「目指す」「見る」「学ぶ」「求める」が出現しており、保育・教育課程に在籍する学生に関わる語句であるといえよう。

また、抽出論文タイトル102件のうち、学会出版物が、３件、紀要論文が、96件、その他が、３件ある。紀要論文は、短期大学・大学・大学院の研究成果であり、その割合が高い。そして、「保育内容　健康」における研究の年次変化については、大学紀要においてかなりの増加の傾向がみられた。加えて、「保育内容　健康」に関する研究の総計は、年次変化に伴い徐々に増加傾向を示していることが明らかになった。その理由としては、大学教員の研究業績重視の増加傾向が考えられる。つまり、発表の方法として、紀要論文は貴重な成果発表の場となっている。

今後も、保育内容「健康」、そして保育内容全般にも視野を広げた研究を継続することは、保育・教育者の育成・資質向上を図るために必要であるといえよう。

参考文献

畑野裕子（2019）「保育内容」の研究動向に関する一考察：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて（藤池安代教授・森田安徳准教授・矢野日出子教授ご退任記念号）神戸親和女子大学児童教育学研究，38：231-245.

畑野裕子・大竹留美・阪江豪（2019）「保育実習指導」の研究動向に関する一考察：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて　教職課程・実習支援センター研究年報，２：107-118.

畑野裕子・阪江豪（2019）保育者養成課程における運動遊び経験の特徴とその学習指導内容の在り方に関する一考察　教職課程・実習支援センター研究年報，２：119-127.

畑野裕子（2018）子どもの「運動遊び」に関する研究動向と展望に関する一考察：CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて　教職課程・実習支援センター研究年報，１：151-162.

畑野裕子・阪江豪（2018）幼少期の運動遊び体験からみた保育者養成課程の学習指導内容に関する一考察　ジュニアスポーツ教育学科紀要，６：63-72.

畑野裕子（2017）体育科の学習指導内容と指導法に関する一考察：中学校・高等学校のダンス授業における「新聞紙」を用いた実践報告を中心に　ジュニアスポーツ教育学科紀要，５：43-56.

畑野裕子（2017）教員養成課程における総合的な学習の学習指導過程と指導法に関する実践的研究：アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた「保育内容の研究・表現」を中心に（開学50周年記念号）神戸親和女子大学研究論叢，50：61-71.

原井輝明・重村美帆・弘中陽子・久光明美・當銘美菜（2019）保育内容の指導における科目間連携の必要性　人間生活科学研究，54・55：39-46.
樋口耕一（2001）KH Coder（http://khc.sourceforge.net/）最終アクセス2017年10月19日.
樋口耕一（2019）KH Coder3（http://khc.sourceforge.net/）最終アクセス2019年11月19日.
樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して，ナカニシヤ出版.
樋口耕一（2015）KH Coder 2.x Reference Manual http://khcoder.net/en/manual_en_v2.pdf.
今津尚子（2019）保育者養成における「アクティブ・ラーニング」を用いた教授法の検討：保育内容「健康」を事例として　九州女子大学紀要，55：25-37.
伊藤照美（2018）保育内容「健康」の授業の学生の自己評価による学習到達度　愛知学泉大学紀要，1-1：149-154.
国立情報学研究所（NII），CiNii Articles- 日本の論文をさがす，（https://ci.nii.ac.jp/）最終アクセス2019年12月 2 日.
厚生労働省（2008）保育所保育指針〈平成20年告示〉フレーベル館.
厚生労働省（2017）保育所保育指針〈平成30年告示〉フレーベル館.
国立情報学研究所（NII）CiNii https://ci.nii.ac.jp/　最終アクセス2019年11月29日.
文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説〈平成30年 3 月〉フレーベル館.
文部科学省（2017）幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要.
村田健治（2019）保育内容「健康」におけるからだづくり運動の効果とアセスメントに関する一考察：幼児の SNS から見る身体的不器用さの改善　教育総合研究叢書，12：35-47.
内閣府，文部科学省，厚生労働省（2018）平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本　チャイルド本社.
内閣府（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領　フレーベル館.
中村和彦（2014）運動遊びの推進（特集 知っておきたい小児保健のエッセンス）小児診療，77-9：1171-1175.
中村和彦（2009）子どもの体力低下から見えてくるもの　体力科学，58：12.
中村和彦（1997）「運動能力の発達と運動遊び」の視点より　日本保育学会大会研究論文集，50：75.
永野泉（2007）保育内容「人間関係」に関する研究の動向：日本保育学会の研究発表を中心に　淑徳短期大学研究紀要，46：33-42.
澤田孝二（2019）近年出版された教科書からみる保育内容関係科目の学習内容：保育内容「健康」および保育内容「環境」の教科書の内容の分析を通して　山梨学院短期大学研究紀要，39：47-56.
清水洋生（2017）幼稚園教育要領における教育内容の変遷―領域「健康」を中心に―　新島学園短期大学紀要，38：43-53.
高井和夫（2019）子どものこころと体の調整力を育む「質の高い運動遊び」に関する研究動向　生活科学研究，41：37-47.
砥堀雅信・土田了輔・永木耕介（1996）幼児期における運動遊びと体育指導に関する一考察　上越教育大学研究紀要，15：223-231.